

早川さくら著『早川一光の「こんなはずじゃあなかった」 わらじ医者からの最期のメッセージ』

"Kazuteru Hayakawa's final message from Dr. Waraji,
Who shouldn't have been like this."

岩本 義浩

Yoshihiro Iwamoto

摘 要

本書では、作者の父親が長年地域医療においての実践を通じて、その家族と患者の生活を理解することの素晴らしさについて多くの出版物や講演会、マスメディアを通じてその良さを広く説明していた。

しかし、いざ自身が高齢化し発病の中、介護や医療を必要となり本当に地域医療は素晴らしかったのか疑問を持つようになる。特に畳の上で死ぬ素晴らしさについて多くの患者・家族に伝え続けてきたが、実際は事業所・病院などの都合によって生活が決まっている。こんなことが本当に良い地域医療（福祉）だったのか疑問に思いつつ、その様子を筆者が逐一、早川一光の声として拾い上げたものをまとめたものである。

キーワード 地域医療、訪問看護、訪問介護、専門職の意義

はじめに

2009年秋、当時私は千葉県千葉市の短期大学で働いていた。当時学科長から「京都のラジオ番組で地域医療について研究されている医師が居られる。是非、本学科で講演会にお呼びしたい」とご提案があった。その方が早川一光氏であった。

話は進み当時ご高齢なので来て頂けるかわからないとのこともあったが、ご快諾頂き当時、千葉の田舎まで、朝のラジオ番組を終えたその足で、新幹線に乗って来て下さった。

この本を書店で手にした時、その時のお話が面白く、その中身に引き込まれたことを思い出した。書籍の内容は、娘のさくら氏が書かれていたがこの内容にもすぐさま引き込まれ、あっという間に読み終えた。是非本書を多くの方が手にして頂ければ、嬉しく思い書評と言う形ではあるが紹介したいと思った。

． 本書の概要

本書は、医師として地域医療を推進し続けた一人の医者半生の振り返りある種ドキュメンタリータッチの内容で書き綴られている。地域医療は本来人間が生活する場の「正しい医療」ということを早川医師自身が信じて疑わない「ゆりかごから墓場まで」を在宅で過ごす意義をテーマにしていたことが、本書から窺える。

序論では「こんなはずじゃなかった」と否定的文章から始まっている。

早川医師は90歳の時に多発性骨髄腫と診断され、治療を行わないと年内持つかどうかわからないと主治医に言われる。ここから診るほうから診られる方の立場となった。

日に日に状態が下降していきつつ、よい兆しやもう危ないと言われて入院をするも人の生命のもたらす「生きる」パワーに持ちこたえつつ、退院する様子がリアルに綴られる。しかし、良くなりつつも介護度は上がり一人で歩けた自宅を伝い歩きしなければトイレにも行けなくなる。訪問看護が始まり訪問入浴、訪問介護と公的サービスを自ら受ける立場になる。そのサービス内容に本人の意思が十分反映されていないことに思いが複雑になっていく。それは、最期を在宅で迎えることが「天国や」と患者、家族に言い続けてきたもののいざ自分が制度を受け続けていけばいくほど自分の思いとは乖離していく現状が自分の意志とは別に展開されることの歯がゆさを文章から感じ取れる。その例として次の文章の件^{くだり}で考えたいと思う。

「ヘルパーさんが、食後の薬を小皿に置いてくれます。僕は薬が嫌いで、時々飲み忘れたふりをするねん。

すると最近、薬が僕の喉を『ごっくん』と通り過ぎるまで、ヘルパーさんが傍らを離れません。もうごまかせへん。

時間がくれば食事をつくってくれるし、汚いパッチ（パンツ）も洗ってくれはる。僕が風呂に入れてもらうのは、毎週火曜と土曜です。

（中略）でもわしなあ、この入浴介助にまだ慣れへんねん。

風呂で一人だけ裸って恥ずかしいもんなんやで。それは幾つになってもや。『あんたも脱ぎいさ』なんて言われへんやろ。そんなん言うたらセクハラやん。大騒ぎや。

でも92歳かて『恥じらい』があるんや。『難しい年頃』なんや。

年寄りのはな、風呂に入るのに人の助けを受けなあかんとなった時、ひとつの覚悟をするねん。

わし日頃、『堂々と世話になったらいいんや』なんて偉そうなこと言うてるけど、まだまだ修行が足らんのかなあ」と自戒的に書かれている。

ここから、読み取る内容は、福祉（介護）を受ける立場になると、嫌な事は嫌だと言えなくなる人間の本音が窺えたように思える。他人の手を借りることの申し訳なさからくる"遠慮"が医師として第一線で活躍していた頃を振り返り、自分の伝えてきたことは、患

【書評】早川さくら著『早川一光の「こんなはずじゃあなかった」 わらじ医者からの最期のメッセージ』

者自身に本当に寄り添った医療だったかと言う早川一光氏のテーマがあったのではないかと感じられた。

この文章は、福祉を業にするもの全てが考えなければならないテーマであるように思え、筆者自身も深く考えさせられたものであった。

． 本書の意義

「しばらくは元気やった。熱もでない。でも次第に、ご飯が食べられなくなってきた。水分も少ししかとれない。暑かったからかなあ。

すると、途端に体力がなくな歩けなくなった。家族やヘルパーさんが言う。

『そうめん、一口だけでも食べようよ』

『お水だけでも、ちょっと飲んでみて』

気遣ってくれているのは分かる。でも、『うるさーい』と思う。

こんな時は、食べてもしんどなるんや。食えんときは、食えん。」

この文章に早川一光氏の本音が出ていると思われた。自分でできることは自分でできていたのに第三者を介すとここまで自分の意志が通らなくなるものだと言うことであろう。私も訪問介護で働いていた時「あと一口、あとちょっと」とご利用者へ催促していた自分を思い出した。この時、本人への思いより他の人への引継ぎや家族から「一口も食べさせなかったのか」と言われた時の自分への言い訳から一口でも食べさせたかった様に思う。本人に寄添う介護というよりプロとしての言い訳（本人に言うだけ言って食べなかった）で、自分を正当化し、理屈の通る様に言い訳をしていたと思う。介護というツールを大義名分化し、困っている人への支援であることの本当の意味を今一度考える必要がある様に思えた。

． 論点

他にも本書から考え直す必要のある文面は多くある。福祉に携わり続けてきた私も反省する点は多々あり、現在の福祉の支援や考え方を再考する必要がある様に思える。

その中であえて課題を出すとすれば以下の点になると思われ書き記したい。

「『訪問看護は火曜日と土曜日。入浴介助は週二回までいけます』

退院と同時に組まれた在宅療養の日程。

『わしは、ベルトコンベヤーに乗せられたマグロか』

父は驚きました。

介護保険が実施されるまでの50年間、訪問看護や往診の診療点数がないなか、京都西陣の人たちが求める(住民の意をもつ訪問診療を行って欲しい)医療に応えようと、

父たちは奔走していきました。それはまさに、患者さんが主体の医療でした。

『今日ウンチもらしたから、風呂入れてくれ』とは言えない介護保険。それを言えば、わがままと言われる。

要介護5の人は、もはや一人暮らしが難しくなってくる。慣れ親しんだ家では死ねない。選択肢にも限りがある。

僕たちが手がけてきた寄り添う在宅医療の延長がこれか。(中略)戦後のような追い風は吹いていない。でも選択肢がたくさんある人間らしい老後を送るには、自分たちで発言し、変えていくしかない。

父は最後までそれを発信していきました。」

この上記にある早川一光氏の発言は、生活者の直接的な心情であり、それをわがままとして処理をしてしまう支援側の問題ではないだろうか。早川一光氏には、人間同士の心の空気として感じ、伝わっていた様に思う。この問題は、長年日本の福祉への課題として存在している。

福祉現場で働いている時よく「仕方がない」を何かにつけて連呼していた。「職員不足で仕方がない」「給料が安いけど仕方がない」と福祉が滞るといふそのようなことを自分への正当性として考えていた頃を思い出す。結果、生活者の真の思いは十分反映していない。

生活者への支援内容は、福祉現場で働く職員の心持ち一つで、楽しく心豊かな気持ちで日々を送ることができることを目指した介護支援が必要であると評者は思う。

見方を変えて「仕方がない」から「仕方への工夫」として捉えれば、出来ないことも可能になる。限られた状態から工夫一つで生活者へのニーズに繋げていけると思う。

以上の課題について、原点回帰することが今の日本介護福祉に改めて必要な研究課題であろう。

本書の課題は、評者の今後の研究課題でもある。

(書誌情報：『早川一光の「こんなはずじゃあなかった」 わらじ医者からの最期のメッセージ』早川さくら著 ミネルヴァ書房 版型：A5判 総頁数 253頁 発行年：2020 定価：1,800)